

開催地名：埼玉県川口市	
開催日時	令和3年11月14日（日） 10:30～12:00
開催場所	川口市役所 本庁舎 601 大会議室
語り部	糸日谷美奈子 （千葉県千葉市）
参加者	各町会自主防災組織 30～40 名程度
開催経緯	・大規模災害時の自主防災組織の知見の欠如 ・被災時の実働と運用に関する経験の欠如 ・女性の視点からの防災活動及び運営知識の欠如
内容	(1) 釜石市の防災意識について 私は岩手県で中学校理科の教諭として11年間勤務しており、釜石東中学校で勤務中に東日本大震災を経験した。釜石市は岩手県の沿岸南部に位置する町である。2019年にはラグビーのワールドカップが開催され、この時に使用されたグラウンドは、釜石東中学校の跡地に建設された。釜石東中学校は釜石市の北部に位置する学校で、年に2、3回は避難訓練を行っていた。他にも、隣の小学校と合同避難訓練や総合学習の時間を使って防災学習を進めていた。これらにより子どもたちは災害の怖さや自分の身は自分で守りながら、地域の手助けをしなければならないということを知った。 また、釜石市では明治・昭和の津波などたくさんの被害が出ている。文献により地震発生から約30分で津波が来ること、津波高は13～14メートルに達することを確認しており、すぐに高台へ行かなければならないと理解していた。 (2) 東日本大震災時の状況 3月11日14時45分、地震発生。中学校では帰りの会が終わった時間で、部活の準備や教室に残って友達と会話を楽しむなど、それぞれの時間を過ごしていた。私が職員室で生徒と話をしている時に、職員の携帯電話のアラームが一斉に鳴り出したのである。大きな地震になると察し、外へ出た。地面が波打って揺れていたのが見えた。揺れが収まり始め、生徒は一斉に道路に向かって走り始める。みんなばらばらに走って800メートル離れた駐車場へ避難した。しかし、高さは学校と変わらないことから、さらに最終避難場所である400メートル程離れた高台へ向かった。そこに着いたのは地震発生から約30分後の3時15分だった。ちょうど海のほうから轟く大きな音が聞こえてきた。一人の先生が「津波だ、死ぬぞ、逃げろ」と大きな声で叫んだので、みんな一斉に逃げ出した。山沿いの道をさらに上が

	り、国道も突っ切り、舗装されていない山を登った。家にも学校にも戻ることはできず、雪も降っていたためその場で一晩過ごすこともできない。そこで、山を越え釜石市役所の近くにある廃校になった中学校の体育館まで避難することにした。この避難所に着いた頃には地域住民も集まり、バスケットコート1面程の体育館に約2000人が一緒に夜を過ごした。 東日本大震災により釜石市で亡くなった方は888名、行方不明者154人と、大きな被害があった。幸いにも学校にいた子ども達は助かった。後に「釜石の奇跡」と報道されたのだが、私自身はこの奇跡という言葉に違和感を覚えた。 (3) 東日本大震災を通して伝えたいこと この震災を経験して学びの重要性を感じた。釜石の子どもたちが逃げて命を守れたのは、短時間のうちに大きな津波が来るということを事前に学んでいたからである。これは奇跡ではなく、当たり前行動だった。 釜石市は「津波てんでんこ」という言い伝えがある。これは地震が起きたら、てんでばらばらに逃げましょうというもの。親は子どもを待たずに、子どもは親のところへ行かずに逃げる。自分の命は自分で守るということを、まずは覚えておいていただきたい。
開催地より	これまで被災された方の話を直接聞く機会がなかったため、語り部の方のお話の中で、地震発生時に感じたこと、避難していた時に感じたこと、今振り返って思うことなど、その時々のお話を聞くことができ、このような災害の実体験を伝承していくことの重要性を改めて感じた。